

生光学園 打線振るわず

4度目挑戦も悲願逃す

4度目の挑戦も悲願逃す。死闘の場面から普通に起成はならなかった。生光に。生光は制球が安定しない。左投手対策として、阿南光の左腕エース森山。決勝より右打者を1人増の立ち上がり攻めて2点を先制したが、リード前にピッチャーの足を守れずサヨナラを許し、狙ってコンバクトに振返した。監督の采配は初回に1、二回に阿南光に1点取って勝ち切る力がな

死闘の場面から普通に起成はならなかった。生光に。生光は制球が安定しない。左投手対策として、阿南光の左腕エース森山。決勝より右打者を1人増の立ち上がり攻めて2点を先制したが、リード前にピッチャーの足を守れずサヨナラを許し、狙ってコンバクトに振返した。監督の采配は初回に1、二回に阿南光に1点取って勝ち切る力がな



1 回表、生光学園1死満塁、木村が中前通時打を放ち先制する。

手の善悪は、エラーと手キスヒットでピンチを招き、内角低めの直球をサヨナラ打された。「準備はできていた。最後に信じて任せてくれた」とはうれしかったが、期待に応えられず悔しいと涙ぐむ春藤、ノーヒット

生光学園・幸島博之監督 勝負どころの本が打てるかどうかが試合だった。先制後どう追いつかれ、互いに粘り試合となったが、森山投手にうまく抑えられた。もう1、2点取りたかった。

高専部の先輩が決勝で敗れたのをスタンドで見て感じた勝ち切る難しさを忘れたことはない。勝ったチームにならぬために、こう接したままにしているのが、常に考え行動しない「隠れ」が描けた。一瞬にしか描けなかった「手裏剣」が、青年で引く張、80人を随手大所帯一つに束ねた。決勝の舞台。先登した2年生や1年生が硬くならないように「3年生がカバール」の声をかけた。最終回、阿南光無死一、一死の場面では一回もピンチをしのいできた。やってきたことを信じて。強い言葉で集中を促したが、願ったものは手に入られなかった。「野球の神様は僕たちじゃないと思う。運とかはなくて、チャンスに1本打つ力が足りなかった」

「出続ける苦しさを負わせた」と指揮官は舌を吐きながら、「僕のほうこそ甲子園に連れて行けずに申し訳ない」。必要とされたことで強くなった。唯一無二の主将に涙はなく、感謝を胸に穏やかな表情を浮かべた。



大所帯を背中で引く張る

吉田 隆希主将 (生光学園)

に結び、黙々と土をならす。「この日のために2年半かけてやってきた。全てを出し切れた。サヨナラ負けを喫しても悔(り)としていた。新チームでは部員の投票で主将に選ばれた。例年なら実力で、気なタイプ、気持ちよくに押し出す。監督に叱られてはかたかった。それでも生光中3年の夏に

夏空

試合終了のベルが鳴ると、選手たちはグラウンドに飛び出した。口を真文字への配慮もあった中、2

感謝を胸に完全燃焼

(伊藤典文)